

2013年  
12月5日  
木曜日

田 禾 准教授（人文科学・中国語学）

# 色のくろくろ

今もみじが赤くなって「一番きれいな時期です。日本語と同じ、中国語ももみじが赤くなったといえます。ところが中国語で「彼女は赤くなった」というと「彼女は今人気ものになった」という意味です。その由来は中国人が赤という色に対するイメージから来たと考えられます。赤は血の色ですから、生命力の象徴で「生命力がある、いきいきしている」ということを表します。そして色の中で赤はとて目立つ色ですから、芸能人が成功して、売れている状況にぴったりでですね。また会社で上司に高く評価される人物に「あの人は今紫に近いほど赤くなっているね」とみなが言います。そのわけは古代の中国の官僚の服装の色と関わってきます。唐の時代から、官位を9等分け、一番高い1等から3等までは紫色の官服で、4等は赤で、5等は薄い赤で、

6等から一番低い9等までは緑と青の官服としたわけです。これからも分かりますように、一番高い官位に近い結構いいポジションをしめすとの意味で「紫色に近い赤」と言うことになるわけです。とにかく赤はめでたい色として、結婚、お正月などめでたい時に使用されています。中国の新婚は赤のチャイナドレスで、新郎は胸に赤いリボンで作った花を付けています。赤の生命力にあやかり子供をたくさん産み、幸せいっぱいな家族を作るという象徴になるわけです。お正月は新年を迎えますが、その「年」実は怖い化け物だと言われています。中国には旧暦の十二月三十日の夜に人間を食べに来るとの伝説があります。この「年」の化け物を赤の服と爆竹の音で脅かしてよけるとの習慣は今でも続いています。

日本のお正月には「紅白歌合戦」があります。赤と対照になるのは「白」で、中国文化では「動・静」の象徴となります。ロシアの抽象画の画家Kandinsky氏は白と黒を中国文化と西洋文化の印として内在の異なることを表現したと語りました。白も黒もsilenceの色彩符号であり、葬式の代表色として使用されています。西洋では、死亡を最終的な沈黙と見なし、永遠の終わりだと考えます。中国では、沈黙は次の輪廻の始まりと考え、再生の連想と繋がります。中国の葬式では、遺族は白の麻をおる習慣があります。それは突然な訃報を聞いて、急いで葬式にきたため、事前に準備出来ず、服を作る時間もなく、麻のままのものしかないという意味も含まれているということらしいです。中国の葬式に死者を哀悼する対聯も白の紙で黒の字を書きます。もし空港で中国からの客を迎え

ることがありましたら、赤の紙を使うようにしてほしいと思います。色彩の意味は単一のものではありません。白は更に純粹であるという意味を表すことがあります。でも「白い目」なら、誰も好きではないでしょう。中国語では「白眼（白い目）」と逆に「青眼（黒い目）」という表現で相手に親しみや好意を示す見つきを表します。「赤の目」はどの国も同じ、病気の一種です。結膜炎以外に、中国語では「ねたむ」の意味もあります。英語ではFamily woman saw red over blue movieという文があります。saw redは怒って赤くなった目です。嫉妬するとgreen-eyed 緑色の目をした、やはり外人ですね。色彩の表現は本当に面白いです。ところで、なぜ「面」が白いで「面白い」になるのでしょうか？